

書評・紹介

Neal Donner and Daniel B. Stevenson :

The Great Calming and Contemplation

—A Study and Annotated Translation of the
First Chapter of Chih-i's Mo-ho chih-kuan—

山野俊郎

本書は隋の天台大師智顗(538～596)が講説し、その弟子灌頂が筆録し修治した『摩訶止観』20巻に関する研究書であり、著者はニール・ドナー(Neal Donner)とダニエル・スティーブンソン(Daniel B. Stevenson)の両氏である。前者は『摩訶止観』の研究と翻訳によって、後者は初期天台における四種三昧行の研究によって、共にブリティッシュ・コロンビア大学からPh.D.を取得している。スティーブンソン博士は現在、カンザス大学の Department of Religious Studies の中国仏教の教授の職にある。序文によれば、本書はN・ドナー博士の博士論文(一九七六年に提出。『摩訶止観』「大章」章の英訳を含む)をベースにしており、それにD・スティーブンソン博士の論文を加え、更に英訳の部分を全体にわたって再点検し修正を施したものである。前後二部で構成され、第一部『摩訶止観』と天台仏教の伝統」には次の3篇の論文が収められている。

(1) Neal Donner and Daniel B. Stevenson : The Text of

the *Mo-ho chih-kuan* (『摩訶止観』)

(2) Daniel B. Stevenson : The Status of the *Mo-ho chih-kuan* in the T'ien-t'ai (天台) Tradition

(3) Daniel B. Stevenson : The Problematic of the *Mo-ho chih-kuan* and T'ien-t'ai History

また、第二部には『摩訶止観』巻一～二の「大章」章(T 46, 1a～21b)の英訳文が豊富な脚注と共に載せられている。

欧米の学者によって著わされた天台智顗の教学思想に関する本格的な研究書は、本書で三冊目である。すなわち、最初に智顗の思想を欧米に紹介した英文の本格的な学術書は、アメリカのレオン・ハーヴィッツ(Leon Hurvitz)博士の労作“Chih-i (智顗): An Introduction to the Life and Ideas of a Chinese Buddhist Monk”(一九六二年)である。この著述では、主として天台教判の所謂“五時八教”のシステムに従って智顗の教学思想が紹介されており、また智顗の伝記が豊富な資料にもとづき詳説されている。次いで一九八九年には、ポール・スワンソン(Paul Swanson)博士の“Foundations of the T'ien-t'ai Philosophy—The Flowering of the Two Truths Theory in Chinese Buddhism—”が出版されている。著者は天台の教学思想を“五時八教”に従って解説しようとする従来の傾向に批判的である。そして、この著作では智顗教学の中心的概念である三諦説に注目し、広い教学史的観点を踏えつつ、『法華玄義』の記述の分析を通して、三諦説の形成と本質について論じている。P・スワンソン博士の著作が天台教学の理論部門を

代表する『法華玄義』の主題を正面から取り扱うものであったのに対して、昨年に出版された“The Great Caring and Contemplation『摩訶止観』——A Study and Annotated Translation of the First Chapter of Chih-i's Mo-ho chih-kuan”は天台仏教の実践修道に関する代表的著述である『摩訶止観』をとりあげ、『摩訶止観』をめぐる諸問題について論じ、そしてその「大意」章の英訳を収める。『摩訶止観』の本格的な研究書である本書が公刊されたことは、とくに欧米における天台学や中国仏教学の研究の進展に大きく寄与するものであり、斯学にとって誠に慶ばしいことである。

第一部の3篇の論文においては『摩訶止観』に関わる諸問題が論述されている。(1)の論文では、『摩訶止観』の主題や構成などについての基本的な情報が説示され、また「大意」章と『摩訶止観』全体の相互関係が論じられる。次いで、(2)及び(3)のD・スチーブンソン博士の論文では、唐代から宋代にかけての天台宗の歴史的展開の中で、『摩訶止観』というテキストにどのような課題が荷わされ、そして、どのようにして其のステータスが確立されていたかという問題が、文化史的な側面から解明されている。次に、第二部の翻訳は、大正大藏経第四十六巻に収められる『摩訶止観』のテキストの当該部分を底本として行われ、そして、訳出にあたっては、『仏教大系』巻二十二(二十六所収の『摩訶止観』の本文に会合された湛然著『止観輔行伝弘決』、証真著『止観輔行私記』、蕅空著『摩訶止観輔行講義』及び守脱著『摩訶止観輔行講述』の四種の主要な注釈書を

参照されたという。関口真大校注『摩訶止観——禪の思想原理——』上下二巻(岩波文庫、一九六六)や、最近出版された村中祐生訳『摩訶止観』(「大乘仏典」中国・日本篇6、一九八八)と新田雅章訳『摩訶止観』(「仏典講座」25、一九八九)をも参看し、また、山田和夫編『摩訶止観一字索引』(一九八五)や中国仏教研究会編『摩訶止観引用典拠総覧』(一九八七)などの参考図書類も、翻訳上有益であったと述べている(序文xiv~xv)。

以下、第一部の論文の詳しい紹介や論評は割愛し、第二部の『摩訶止観』「大意」章の英訳について感想や疑問などを少しく述べてみたいと思う。

英訳の文章に触れてまず痛感するのは、漢語の仏教専門用語を英語に移し変えることの困難さということであり、翻訳者の苦勞が窺われる。例えば、本書のタイトルにも出てくる「止観」という用語を英訳する場合がそれである。周知の通り、一つの漢字には通常いくつかの意味が含まれる。止と観という漢字にはそれぞれ三つの意味があると智顗は説明する『摩訶止観』卷三上・釈名。すなわち、「止」の意味は第一に心の散乱や邪念が治まり静まることであり(「止息」)、第二には煩惱が止息することによって現前する境涯に安住し停住して不動なることであり(「停止」)、そして第三には、本来無明と法性は相即するものであり、無明と法性は共に止・不止の観念を超えているが、仮に無明を不止と呼び、それに対して法性を止と称するのである(「対不止止」)、と説かれる。一方、「観」にも、「止」の三義に

対応して、三通りの意味があるという。また、「絶待止観」という用語においては、「止観」とはもはや単なる宗教的实践を示す言葉ではなく、善惡の相対を超え、煩惱即菩提や生死即涅槃の円理が体証された実相の世界そのものを意味している。このように止と観の字義に従ってデリケートな解釈が加えられていくことになる。漢字の多義性にもとづく「止観」という用語の奥深く混然とした印象が、「calming and contemplation」という訳語では平板なものに変わってしまうように感じられる。漢語の原意の香りを残しつつ、一つの訳語を決定しなければならぬ翻訳者の苦勞が偲ばれる所以である。

『摩訶止観』の翻訳において、著者は特に湛然(711~782)の『止観輔行伝弘決』の解釈を実にこまめに参照している。それにもとづいて簡略で難解な『摩訶止観』の原文が注意深く正確に訳出されており、信頼できる英訳文が示されている。また、脚注にはしばしば『止観輔行伝弘決』の注釈の訳文が長々と紹介され、読者の理解に大いに益するものがある。

そもそも智顗が57歳の折りに荊州の玉泉寺で行った止観の講義を、弟子の灌頂が筆録したのは隋の開皇十四年(594)のことである。それ以降、現行の『摩訶止観』が成立するまでに幾つかの段階があったことが知られている。^{*}智顗の講説をうけてま

^{*} 佐藤哲英著『天台大師の研究』pp. 399~400

ず『摩訶止観』の原型である「聴記本」が成立した。灌頂はその後これを更に整理し「整理本」、次いで修治が加えられ「修治本」、そして最終的な「再治本」が完成したのは大業三年

(607)から貞観六年(632)の間のことであり、ここに現行の『摩訶止観』の成立を見るのであるとされる。そのような幾つかの成立過程を経て、読者は智顗の肉声からますます遠ざけられることになったとも言えよう。簡略であいまいな部分を多く含み、難解さをもって鳴る『摩訶止観』の本文に、該博な知識をもとに詳細な注釈を施し、後世の『摩訶止観』解釈の流れに決定的な方向を与えたのが、中国天台宗の六祖荊溪湛然の『止観輔行伝弘決』40巻(69年頃)であった。湛然は『摩訶止観』に引用される經文の典拠を広く探り、また、儒教などの外典の豊富な知識を駆使して本文中の語句の意味や字義を明らかにし、原文の明確な読みと理解を示した。『止観輔行伝弘決』が『摩訶止観』を読み解く上で古来不可欠な注釈書であったことは言を俟たない。しかし、一方で、『止観輔行伝弘決』の湛然釈を全面的に依用することの危険性も唱えられている。すなわち、智顗が『摩訶止観』を講説してより七十年ほど後に成立した『止観輔行伝弘決』には、当然のことながら、湛然を取り巻く当時の天台宗をめぐる独自の歴史的状況が、色濃く反映されているからである。他宗派との対決姿勢を深める中で、湛然は自宗教の獨創性や優越性を明確にする使命を担っていた。智顗の重要な教説として湛然がとくに強調した性具説、一念三千説、十境十乘観の規定、五時八教説、あるいは法華超八説などの解釈に、その間の事情が窺われるが、それらの教説が必ずしも智顗の考え方と全同であるとは言いい切れない。湛然釈を通して『摩訶止観』の原文を読み解いていく上で、これは特に留意さ

るべき観点である。

次に、本書の詳細な脚注に盛られた情報が、読者にとって大変有益であるケースを二箇所ほど紹介してみたい。

まず、pp. 243~244 の脚注 112。これは『摩訶止観』（卷二上）四種三昧章中の「常行三昧」の部分に記される、「自念仏從何所來……心作仏心自見心見仏心是仏心是我心見仏」（T46, 12c）のバラグラフの英訳文に対して付けられた注記である。この見仏に関する文章は般舟三昧經に依るものであり、大変重要な經文でありながら、その全体が混乱しており信頼が置けず、読解の困難さにおいて悪名高い箇所である。著者は、脚注においてこの文章を『止観輔行伝弘決』（卷二・二）の注釈（T46, 187b）に従って訳出した旨を述べ、そして、その注釈の英訳文を長々と引用し紹介している。読者はこの脚注によって、般舟三昧（見仏）に関する天台流の解釈を知る上での有益な情報を得ることができるとができる。

次に、p. 210 の脚注 353。『摩訶止観』（卷一下）に述べられる六即の第三「觀行即」の説明において、「如蟲食木偶得成字是蟲不知是字非字」（蟲木を食ひて偶字を成すことを得るも、是の蟲是の字非字を知らざるが如し）という文章が記される（T46, 10b）。この文章が經典の文句であることについて、『摩訶止観』の原文は何も語っていないが、脚注によれば、これは涅槃經（南本）卷二からの引用文*（T12, 618b）である。涅槃經

* 智顗の著述における引用文の特徴について、ポール・スワニンソン博士に次の論考がある。

「摩訶止観」における經典の使用(1)——新「引用学」の

試み——『印度学仏教学研究』第41卷第2号所収、1993)

では、(1)専ら唯だ一種の藥(教え)でもって衆生のあらゆる病氣(煩惱)を治療できると誤解した稚拙な医者(仏教者)を譬えたものである。一方、『摩訶止観』の当該箇所においては、この經文は、(2)觀行実践(觀行即)が単なる聞法(名字即)に勝ることを示す譬えとして使用されており、譬えが本来とは異った意味合いに転用された例である。しかし又、四種三昧章の末尾において（T46, 18c）、衆生を惑わす無知で傲慢な禪師を激しく批難する箇所、智顗は右記の(1)(2)の意味合いを兼る譬えとして此の經文を引用しているという。そのような情報が脚注353の説明を通して読者に与えられる。

最後に、翻訳上疑問に思われる語句の二、三を取りあげ、私見を述べてみたい。言うまでもなく、以下に指摘するような些細な問題によって本書の価値はいささかも減ずるものではない。

まず、「南岳事慧文禪師、当齊高之世²⁰独歩河淮、法門非世所知、履地戴天莫知高厚」(南岳は慧文禪師に事ふ。齊高の世に當って河〔北〕淮〔南〕に独歩す。法門は世の知る所にあらず。地を履み天を戴ひて高厚を知ること莫し)（T46, 1b）の濯頂の序文の一節に対する訳文（本書 p. 106, l. 13~p. 107, l. 2）について考えてみる。この文中の「独歩」の語について湛然は、「化を競う者無きが故に独歩と云々」（T46, 192a）と注釈する。これを著者は脚注 50 において、「Because he did not vie with others for converts the text says 'wandered alone'」²¹と訳

しており、つまり、慧文が他の仏教者たちと教化の活動を競い合うこともなく、他者と関わり合うこともなく、人知れず河北・淮南の地を遊行した、と了解しているようだが、それは誤読であると思われる。慧文に関する上記の文章は、彼の法門や教化活動の素晴らしさを顕彰しようとしたものと考えるべきであり、それはむしろ、次のように理解するのがよいだろう。すなわち、慧文と教化活動を競い合える仏教者は他に無く、その法門は当時の人々の思いも及ばぬほど深く豊かな内容を持つものであり、彼の教化は河北・淮南の地に及んでいた、と。湛然も上記の文章を、そのような意味合いに注解しているのである。

後世の資料ではあるが、『統高僧伝』巻十七の慧思伝に見られる「時に禪師慧文、徒数百を聚む。衆の法清肅にして道俗高尚す」(T 50, 562c)という記述も参考になるだろう。また「履地戴天、莫知高厚」という文章の解釈については、『句子』勸学の「不登高山、不知天之高地。不臨深谿、不知地之厚也」という記述も参照されるべきである。すなわち、これを参考にすれば、「履地戴天、莫知高厚」という文章は、「慧文の真価が分らぬ世間の者たちにとって、彼の法門の深さ(高)と豊かさ(厚)は全く想像だに及ばぬものだ」と解釈できるだろう。

次に、「或從知識、或從經卷、聞上所說一実菩提」(或は知識に従ひ、或は経巻に従ひて、上に説く所の一実菩提を聞く)(T 46, 10b)とある文章において、「知識」という語句が“personal acquaintances”と訳されている(本書 p. 210, l. 1)。かかる「ここに言う『知識』とは単なる知人のことではなく、『善知識』

のことである。T 46, 6c の聞法発心を説く部分に「或從仏及善知識、或從經卷、聞生滅一句」という類似の文章があり、著者はこの文中の「善知識」を正しく“worthy spiritual friends”と訳出している(本書 p. 171, l. 9)。

なお、終わりに、『摩訶止観』の翻訳に関するものではないが、本書の第二章の冒頭部で長く引用されている『仏祖統紀』巻六の英訳文について、少し触れておきたい。その「自夫経論東度、教滿真丹」(夫れ経論の東に度りし自り、教は真丹に満つ)(T 49, 177c)の文章中の「真丹」という語句を、著者は“elixir of truth”(真実の鍊金薬)と訳している(本書 p. 31, l. 2~3)。しかるに、例えば、『摩訶止観』巻五下「破法遍」の章において、インドの仏陀と中国の老子・莊子とを比較して、「仏迹世世是正天竺金輪利利。莊老是真丹辺地小国柱下書史、宋国漆園吏」(仏の迹は世世に是れ正天竺の金輪利利なり。莊老は是れ真丹辺地の小国柱下の書史、宋国の漆園吏なり)(T 46, 68c)と述べられる。あるいは又、『止観輔行伝弘決』巻四之二では「振丹」「震丹」及び「真丹」が共に中国を意味する言葉であることが説明される(T 46, 258b)。このように「真丹」とは「真実の丹薬」の意ではなく、中国のことである。

(The Great Calming and Contemplation, A Study and Annotated Translation of the First Chapter of Cih-i's Mo-ho chih-kuan, by Neal Donner and Daniel B. Stevenson, A Kuroda Institute Book, Honolulu: University of Hawaii Press, 1993, xx+385 pages, 15.5×23.5cm)